第29回ベルマーク便りコンクール　入賞校・園を訪ねて

優秀賞 愛知・今伊勢西小 とことん わかりやすく

優秀賞に選ばれた愛知県一宮市の市立今伊勢西小学校（山田修校長、457人）は今回のコンクールに初応募して、いきなり初受賞を果たす快挙となりました。PTAの任意で編成されたボランティアクラブ。「ベルマーク運動への大きな励みになります」と喜んでいます。

岐阜県との境を流れる木曽川左岸沿いにある同校は、1975（昭和50）年に開校しました。当初には、PTAや児童会でベルマーク運動を展開していましたが、運動は長年にわたり休止になっていました。

しかし、地元幼稚園でベルマーク運動に携わってきた保護者の有志たちが立ち上がり、「小学校にもベルマーク運動は必要」として、運動の再開を決めました。

ベルマーク運動の趣旨に賛同してくれる保護者の方たちに、ボランティアとしての参加を呼びかけ、2009年に「ベルマーク☆クラブ」として発足しました。☆は、「希望」と「クラブに入ってほしい」という願いが込められています。

活動は年に9回。校舎2階の学習室に集まり、回収箱に集められたベルマークを仕分けし、発送作業を行っています。

ベルマーク新聞の発行は随時。年度初めに、ベルマーク運動の意義や仕組み、収集方法について説明。ベルマーク運動への協力と集計ボランティアの参加を紙面で呼びかけています。

紙面は、子どもたちにも読んでもらうために、できるだけ平易に紹介。手書きのイラストを多く取り入れ、文章は自分の言葉で素直に表現し、読み手にとって、簡潔でわかりやすい紙面作りに努めました。

小森寿子代表が、初代代表の牧谷佳代子さんと2代目代表の大井貴子さんのアドバイスを受けながら、編集しています。

ベルマーク運動に対する保護者の意識を共有するため、新聞では、様々な情報を発信しています。

「ベルマークを集めたい方」もその一つです。学校の玄関に設置したベルマーク預金の使ものガイドを展示。保護者や子どもたちに購入を希望する商品に付せんをつけてもらい、付せんが多い商品を数点にしぼります。全家庭に投票用紙を配布し、得票の多い商品を購入します。

それらの結果はすべて、ベルマーク新聞で紹介。新聞に寄せられた要望もできるだけ運動に反映し、預金で購入した百人一首やディスゲーターを使って遊ぶイベントも実施しました。ベルマーク運動への認識が一層深まりました。

小森代表は「初めての応募なのに、こんな立派な賞をいただき、驚いています。新聞の枠にとらわれず、自由に楽しく編集しています。ボランティアクラブとして、今後の大きな励みと力になります」と喜んでいます。

山田校長は「子どもたちのためにも趣向をこらし、分かりやすく作っているところが評価されたのだと思います。地道な運動ですが、今回の受賞は、大きな支えになるでしょう」と話し、クラブの方たちの尽力に感謝しつつ、受賞を祝福していました。

優秀賞の盾を手に受賞を喜ぶ小森寿子代表（前列中央）とベルマーク☆クラブのメンバーたち

優秀賞 京都・常磐野小 児童発案のキャラ人気

京都市立常磐野小学校（松本威雄校長、604人）の「ベルマークボランティア」が作成している「ときわのベルマークだより」が、優秀賞に選ばれました。5年間、カラーの便りをこまめに発行。2014年1月にはテトラパックの紙容器回収のため児童が作成したオリジナルキャラクターをふんだんに使い、親しみがアップしています。

「たより」は13年までの「ベルマーク新聞」を改題。B4判1枚の両面に記事を載せ、年に10回近く発行し、毎回約600部を児童の家庭に届けています。PTAの大槻洋子さんと芦田奈津子さんが毎号、テーマを決めて編集し印刷までしています。

例えば14年7月号では、ベルマーク児童委員会の活動を紹介。さらに同小がベルマークで購入したドウダンツツジなどの苗木が東日本大震災の被災地の学校に贈られたことも書きました。また、毎号、協賛会社の商品紹介もしています。

ボランティアは13年秋からテトラパックの回収に力を入れています。児童らに回収を呼び掛けようと、パックのロゴマークをもとにオリジナルキャラ「テトラくん」「テトリンちゃん」を作成しました。児童委員会にキャラの作成を募り、5年生の児童の作品をイラストの得意なPTAが仕上げました。キャラは便りのほか、学校の職員室前に設けた「ベルマークコーナー」にも張り出されています。

同小のベルマークボランティアはPTA組織から独立した活動です。5年前、下火だったベルマーク運動を立て直そうと、大槻さんが発案しました。

学校に来なくても、マークの切り取りや仕分けを自宅でできる「集計キット」を作りました。マークを貼る台紙や、回収、仕分けの方法や協賛会社を書いた説明文、のり、はさみなどをA4判ファイルに詰め、初めての人にも取り組めるようにしています。現在、35人いるボランティアのうち13人が自宅での作業です。また月に1回の作業での仕分け作業には卒業生の元PTA5人も協力し、わいわい楽しみながら取り組んでいます。

地域のスーパーや電器店なども回収に協力しています。それまで年間1万点ぐらいだったマークの収集が、10万点にまで急増しました。大槻さんは「毎回、便りの記事を探すのは大変だけど、子どもたちがよく読んでくれているのが楽しい」と話しています。

集めたマークで14年には中庭の大時計を買い換えました。しかし新しい時計の設置工事の費用はマークで負担できません。そこで過去3回のコンクールで得た佳作の賞金を充てました。今回の優秀賞では、近くマークで買う体育館用の大型ヒーターの周辺機器を購入する予定です。

同小は京都市右京区にあり、近くには嵐山や嵯峨野、東映太秦（うずまさ）映画村などがあります。70年にベルマーク運動が盛んな太秦小学校の分校として発足しました。松本校長は「太秦小とはベルマーク活動のことでよく話します。お互い刺激しあって学校をよくしてくれて本当にありがたいです」と話しました。

仕分け作業に励む常磐野小のベルマークボランティア

優秀賞 東京・碑小 紙面に仕掛け 収集誘う

東京都の目黒区立碑小学校（喜多輝顕校長、556人）の「いしぶみベルマークだより」が、初めての応募で、「優秀賞」に輝きました。2013年度からの発行と日は浅いですが、保護者にベルマーク運動への関心を高めてもらおうとの狙いで写真、イラストを多用しての華やかな作りが特徴です。

碑小のベルマーク運動は1962年から取り組まれてきていますが、地道な活動が続いていました。というのは、保護者はPTA活動には熱心な半面、ボランティア活動への関心は低かったこと、またボランティア組織も人数に見合った活動に抑制してきたためです。「各教室にベルマーク収集箱があるけれど、集めているの？」という状態でした。

13年度、ベルマーク・ボランティアの代表となった倉部浩子さんは「学校予算に限りがある中、子どもたちが欲しがるボールなどを購入するにはベルマーク運動は欠かせない。そのためには、碑小でも活動に取り組んでいることを、保護者に訴えなくては」と活性化のため広報紙発行に着手しました。

パソコンソフトのパワーポイントを使っての、B4判二つ折り、4ページの紙面です。

1面に前月の集計結果、点数と枚数の多いベスト5を掲載して、身近な商品にマークがついていることを知らせます。中面には、気づきにくいマークの案内（13年3月号）、キャラクターがデザインされたマークがあるのをご存知？（13年6月号）など、興味をそそる工夫をこらします。

生活に即して協力が得られるよう、バレンタインデーにちなみ、「ビスケットにチョコペンでメッセージを」「紙コップにシールやスタンプを貼ってラッピング」などハウツーを写真付きで掲載、マークつきのビスケットや紙コップ商品を紹介します。また、マーク付きのマヨネーズ、ギョウザの皮を使ってのレシピを紹介するなど、さりげなくマーク収集につながる仕掛けも込めています。

これらの情報、画像はベルマーク教育助成財団や協賛会社のホームページから得ています。

「知らなかったベルマーク情報」は保護者470家庭に徐々に浸透し、収集点数が増えました。11年度2万5676点、12年度2万1258点だった年間点数は、発行を境に、13年度は前年度を約1万7千点も上回る3万8182点と増え、14年度も12月集計時点で3万4444点で右肩上がりに表れています。

こうして集められたマークを14年度はベルマーク・ボランティア10人ほどで整理に当たっています。5月から年間9回（4、8、3月休止）回収、その日のうちに仕分けて集計し、ベルマーク教育助成財団へ送票しています。

「受賞を励みに、今後もベルマーク活動って面白そう、楽しそうと思っていただける紙面を続けてゆきたいです」。倉部さんは話します。

受賞を喜ぶベルマーク・ボランティアの村沢純子さん、代表の倉部浩子さん、伴雅子さん、佐藤新子さん、安藤美和子さん（左から）

優秀賞 福岡・板付小 2年連続 手作り・気配り

福岡市立板付小学校（村瀬敏智校長、764人）のPTA「ベルマーク会」が、2年連続して優秀賞に選ばれました。イラストや写真を織り込みながら、回収手順などを丁寧に説明しています。また、収集に協力してくれている自治会の回覧板用や地区の公民館、郵便局用の「ベルマーク便り」も毎年作り続けています。メンバーの自宅作業や全体集計作業時の説明書もすべて手作りで準備するなど、気配りの行き届いた活動となっています。

ベルマーク会は23人。川口淳子さんが会長になった2011年から、それまで年2回発行だったベルマーク便りを新役員の決まる5月と、マーク収集月の6月、10月、翌年1月の計4回に増やしました。

5月のPTA委員選出の時に配る最初のベルマーク便りは「小さなベルマーク。意外なところについてます」とイラスト付きで関心を高めます。6月号では、仕組みを紹介。収集活動が「社会貢献」につながっていることをアピールしています。そのほか、使用済みインクカートリッジが点数になりエコにもつながることや集計結果や購入品を伝えています。

テトラパックの収集は、写真付きで紙容器の種類やマークがある位置、マークは切り離さないことなどを伝えました。先生方にも、ストロー袋を外して、側面と底部の折りの部分を引き起こし、軽くつぶす方法を児童に伝えてもらえるように「給食テトラパック回収便り」を渡し協力を呼び掛けます。ジュース容器の回収は、1回で約500点になるそうです。

容器回収は、実は4年前に当時6年生だった川口さんの長女が、マークに気付き、そこから取り組むきっかけとなったそうです。

同じころ、校区の自治連合会長さんに住民の皆さんに協力していただけるようにお願いに出かけました。会長さんは快く受け入れてくれました。「板付校区の皆さまへ」と書かれた地区用のベル便りは毎年、500枚を準備しているそうです。

校区内の板付公民館と麦野郵便局、雑餉隈（ざっしょのくま）郵便局、諸岡郵便局には、購入品の「デジタルタイマー」が写っている授業風景写真と、支援協力のお願い文が、ベルマーク一覧表と共に張り出され、回収箱も置かれています。

こうした活動が実り、2011年度の集票点数は15万点を超えました。その後も10万点近くの収集活動が続いています。

村瀬校長は「ベルマーク便りによって、地域との連携がより深まりました。公民館や郵便局に届けてくれたり、学校にも直接持って来ていただいたりするケースもありました。卒業生から、寄贈連絡のうれしいメールも届きました」と話していました。

川口さんとともに活動を支える副会長の内山愛さんは「子どもがマークに気付き、家でも話が弾みます。ボランティアにつながるベルマーク運動をこれからもがんばりたい」と笑顔で話していました。

連続優秀賞を喜ぶ村瀬校長と、今回と前回の盾を手にする川口さん（左から）

特別賞 長崎・ひかり幼稚園 アイデアギュッ 号外も

長崎市の学校法人ひかり学園ひかり幼稚園（大谷英也園長）が、「特別賞」に初応募で選ばれました。子ども用体操用具の「ソフト跳び箱」（セーフティー跳び箱）の購入を目指して、より活発に運動を進め、ベルマーク便りづくりにも力を入れたそうです。近くのスーパーで、対象商品を調べてみたり、ベルマークに関するクイズを出題したりしてアイデアがギュッとつまった紙面になりました。受賞を知りすぐに号外を張り出すなど、園児159人の通う園内に喜びの輪が広がりました。

ベルマーク便りを作っているのは、同園の保護者による「教育後援会」のベルマーク担当、楊井綾（やない・あや）さん と部奏子（うらべ・かなこ）さん、勢上（せがみ）みなみさん、松本美香さん、中原悠（ゆう）さんの5人。

5月に担当となってから、楊井さんは、近くのスーパーの商品棚の値札の脇に「ベルマーク対象商品」と書かれている小さな札に目が行きました。「普段は気付かなかったのに、役員になってから注意を払うようになり、ハッとしました」。さっそくメンバーで「ベルマークを集めるポイントは、やはり何についているかを知ることよね」と話し合い、保護者が最初に交流する6月上旬の「茶話会」に合わせて資料づくりを始めました。

資料には、「1点も積もれば山となる。ソフト跳び箱（約13万5000円）まであと2万1000点（昨年度末）。今年度の購入も夢ではありません」と、目標をしっかり伝えました。

集めるポイントとして、協賛会社名や商品名を積極的に知らせました。「マヨネーズ、ドレッシングはやっぱりキューピー」「カップラーメンは日清」「カップスープはクノール」「ミートボールはイシイ」「4本入りちくわ、魚肉ソーセージはニッスイ」などと記しました。

次に編み出したのがクイズを出して、関心を高めてもらう事。7月号は○×式のクイズベルマーク入門編。9月号は、穴埋め問題をつくりました。イオントップバリューの参加や森永乳業のフィラデルフィアクリームチーズ2品への商品変更、ウェブベルマークもしっかり紹介しました。

絵の上手な中原さんはテトラパックのマークを水彩で描きました。運動の紹介時に貼りました。また、紙パック回収のポスターも手作りで、メンバーの松本さんの家族が経営するコンビニ店に掲示して、来店するお客さんたちに協力を呼び掛けています。積極的な活動で、例年だと3箱（1箱10キロ）分の紙容器収集が8箱分まで増えて、テトラパック以外のパックの混入もほとんどなくなったそうです。

「新幹線」や「機関車トーマス」型のユニークな送迎バスを走らせている同園の大谷園長は「受賞を知った深夜に号外を作ってくれて翌朝の開園前には、もう張りだされていました。よく頑張ってもらっていたので、初受賞は本当にうれしい。子どもたちの喜ぶソフト跳び箱が、購入できますように期待しています」と話していました。

左から中原悠さん、卜部奏子さん、大谷英也園長、楊井綾さん、勢上みなみさん、松本美香さん

恥ずかしがりやのベルマーク探して

紙面の先に見える笑顔

審査から

心のこもったベルマークだよりを、全国から寄せていただきました。

なかには、ほとんど毎月発行していただいている学校もあります。ただでさえマークの仕分けや集計でお忙しいでしょうベルマーク委員の皆さんに感謝しながら、読ませていただきました。大作、傑作の数々は財団職員がお訪ねして取材したレポートをご覧ください。

今回、入賞には届きませんでしたが、「そうですね」と思って読んだ応募作があります。大阪府羽曳野市立下開保育園の「ベルマークだより」でした。A4判のコピー紙1枚にモノクロ印刷です。「今回初めてベルマークだよりを作りました。記念すべき第1号を送らせていただきます」というメモが同封してありました。

その「1号」に「ベルマークは恥ずかしがりやさんなので、パッケージの隅っこに付いている事が多いです。宝さがしをするみたいな感覚で探してみてください」と、コツを伝える囲み記事がありました。

ベルマークは恥ずかしがりやさん！

なんて言い得て妙でしょう。あのスープ、あの石鹸、あのお菓子……。包装の恩わぬところにマークがついています。

そして、この恥ずかしがりやさんたちが全国2万8千の学校で集まって、毎年5億円もの設備購入になっています。サッカーボールから冷水器、運動会の綱引きからピアノまで、恥ずかしがりやのベルマークの力で、子どもたちへのプレゼントが実現します。

あざやかな色や、巧みなイラストつきのたよりをいま作ってくださっている学校の委員さんたちも、たぶん最初は手さぐりの「1号」から始められたことと思います。保育園はもとより、小さな学校のベルマークの世話役の方も遠慮なく、次は作品をお送りください。紙面から届く皆さんの笑顔を楽しみにしています。

（常務理事　中島泰）

◆この特集の取材はベルマーク財団の大阪事務所長・田中昭宏、福岡事務所長・桜木正彦、名古屋事務所長・峰正明、フリーライター・安田彬氏が担当しました。